

何を持って復興なのか

(1) 初めに

震災から4年が経った。今当時のことを思い出すと、私は中学三年生の時で、全校生徒が集まったの収穫祭の最中であった。テレビでは、津波が三陸などを襲う瞬間の映像を何度も見た。しかし、高校生活を終え大学生になり、次第に震災のことから疎遠になっていた。そんな大学2年生の時、ある教職の授業で大川小学校のことについて学んだ。「悲劇の学校」と呼ばれたこの学校では、なぜ多くの尊い命を救えなかったのか検証し、本当に勉強になった。そんなことをきっかけに、改めて震災について考え直したいと思い、このFSに参加した。

(2) 被災地のいま (視覚)

仙台から石巻をつないでいる仙石線が全区間で開通したのは、今年の5月のことである。さらには女川駅が4月に完成と、震災から4年が経った今でもなお、復興を進めている段階である。石巻駅につき、周辺を散策した時の第一印象は、「異質」であった。町中を歩いていると、震災前からあった建物と、震災後に建てられて建物がひと目で分かった。日本のどこにでもありそうな街の中に、明らかに真新しい建物が建っている。しかもそれは、ひとつやふたつではなかった。また北上町に向かうと、駅周辺とは違う「異質さ」があった。海沿いに何も建物が建っていない。新たに建てる堤防に向けての、土嚢の整理、それだけ。Aさんの話によると、海岸部は津波避難区域に指定され、住宅等が建てられないようになったという。以前、海岸部にあった住宅が津波で流され、その後、その場所には需要がないため、新たに建てられた建物はなかった。そして車に乗っていて、通りかかるのは復興工事に向かうダンプカーのみ。非常に多い印象を受けたが、これでも減ったほうだという。話しによると、復興住宅建設のためのものらしい。また、大川小学校に連れて行ってもらったが、わたしが想像していた以上に、大川小学校は、津波が来ると予測するのは難しい場所であると感じた。やはり川から逆流して、津波が押し寄せてくることが予測できなかったらしい。津波が来た瞬間の写真をいくつか見ていると、北上は山に囲まれた地域でもあるため、「こんなところにも津波が押し寄せてきたのか」と思う場所が、いくつも見受けられた。

(3) 被災地のいま (聴覚)

現地の人から様々なお話を聞くことができた。その中でも特に印象に残っているSさん

の語り部でのお話が印象的だった。「息子に漁業を継いで欲しくない」そうおっしゃっていた。「子供の代にまで辛い思いをさせたくない」。本音だと感じた。津波で仕事道具が全て流され、一からのスタート。流されたものは帰ってこない。誰も弁償してくれない。一からのスタートといっても、スタートし始めたのはつい最近である。それに加え、震災から4年間、一緒に過ごしてきた仲間たちとの別れ。復興住宅建設のために、今住んでいる仮設住宅が取り壊され、強制的に新しい、他の仮設地域に移り住まなければならないらしい。しかし、北上町の人というのは、私にとってものすごく温かい人々であると感じた。「その根拠は？」と聞かれると、説明するのが非常に難しいのだが、心の底からまたこの街に来たいなと思える場所であった。だからこそ個人の手ではどうにもならないが、その温かい人とのつながりが切れることなどのことに対して、諦めきれないことが未だにたくさんあると私は感じた。

メディアを通じて被災地の状況を見てみると、先程も上げたように、「女川駅が復興した。」「仙石線が全線開通した。」などと、どうしても明るいニュースばかりが取り上げられているが、しかし現状はそうではない。いいところばかりが特集されているが、実際に大変なのはこれからである。ローンで家を建てたりと、今までかからなかった money が掛かるようになり、被災者はより経済的負担が迫られる。にも関わらず日本は、オリンピックに向けお金を重点的に使用し、年々復興予算額が減少してきている。メディアや政府は、「復興」という言葉で、震災を片付けているが、「何を持って復興なのか」非常に疑問に感じた。何よりも感銘を受けたのが、被災地の人々が、「もし今後日本のどこかで震災が起きたら、今度は私たちが、被害にあった人を助けたい」と言っていたこと。「私たちはたくさん支援をしてもらったので、今度は恩返ししたい。」というのだ。自分たちが未だ完全に震災から立ち直ったわけでもないのにも関わらず……。

(4) まとめ

今回、初めて被災した地域に行ったが、4年がたっても学ぶ部分はたくさんあり、被災地の過去、現状、今後の取り組みなどを考えると、我々は今後、彼らに向けて何ができるのだろうか。被災した実際のお話を聞くだけでいいのか、なにか実際に Action を起こすべきなのか。やはり4年という月日が経つと、どうしても直接関わっていない人にとって、3.11のことは忘れられてしまうのは必然であるかも知れない。しかし、4年がたった今だからこそ分かることもたくさんあると思われる。だからこそ、いまからでも私たちは少しでも被災地に足を運び、現状を目に焼き付け、一人ひとりが、具体的に彼らに対してどのような Action を取ることが出来るのか考え、実行していくことが、本当に大切なことであると感じた。